イカちゃんがかり

こっくん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

岩手在住中一の女の子藤原手折（ふじわらたおり）は祭神雷と保育所以来のお友達。本来いなかったはずの彼女は、イカちゃんの拠り所として彼女を幸せへ導けるのだろうか。

目次

イカちゃんとのおもいで ―― 1
独立のきうん ―― 5
道場にいこう！ ―― 12
二つの相談事 ―― 19
女流名跡 ―― 23
あっとホテル ―― 39
チャレンジマッチ ―― 46
一斉予選（？） ―― 53
ソフト指し ―― 59

イカちゃんとのおもいで

わたしはいつもひとりだった。
ほいくしょにおともだちもいないし、おかあさんはいつも家にいない。
でもそんなある日、ひとりのおともだちができました。

「ねえ、しょうぎしない？」

＃

「懐かしいね、この写真。」
私はアルバムの写真を指す。そこでは2人の女の子が将棋を指していた。
「ん。」
「たしか、将棋の指し方教えたばっかりなのにイカちゃんすっごく強くて、私も手加減無しでボコボコにしちゃったんだっけ。」
「そうね。ひひっ。初心者相手に穴熊はひどくないかなぁ？」
「ごめんごめん。気づいたら詰まされてそうでね……。」

頬をかき答える。イカちゃんはこのころから直感的な読みが強くて、十分に固めないと安心して攻められなかったのだ。

「それで毎日将棋指すようになって、小学校の時も2人で将棋クラブでよく指したよね。」

ページをめくる。今度は成長したふたりが机に置いた盤を挟んでいる。

「ん。」

「最初は先輩も居たけど、いつの間にか2人だけになっちゃったねー。新入生も入ってこなかったし、なんでだろう?」

「しらなーい。(だって、みんな弱いし、たおとの対局の邪魔ばかりするもの。)」

もう数枚めくると多くの小学生の前で二人が対局する写真がある。

「小学生名人戦にも出たよねー。事情があって全国大会には行けなかったけど。」

「ひひっ、みんな強くなかった。たおと将棋指す方が楽しい。」

「そうだね……。私もイカちゃんと指すことしかなかったから出てみたらいつの間にか決勝で、しかもイカちゃんも上がってきてたから。結局決勝しかやりがいなかったな。」

「そーう。たおちゃんはうちが育てた。」

イカちゃんが私を後ろから抱きしめる。

「そー、そだてられたのだ―。」

振り向いて私も抱きしめて、そのままゴロゴロと転がっていく。
「中学生になっても将棋続けよう。」
「ひひっ、当たり前。……高校は？大学は？」
「そもそもイカちゃん大学行く？プロにもなれるんじゃない？」
「うーん？」
「それに、プロになったらきっともっと強い人もいるし、一人暮らしもできるよ。」
「そっか！プロになるのもいいかもねぇ。たおちゃんはプロなる？」
「うーん、私はあんまり興味ないかな。将棋も好きだけど、もっと好きなことがあるから。」
イカちゃんを応援すること。それも私のしたいこと。それに勉強も好きだし、最近は将棋の仕組みを考えてみたいな。
「そっかぁ……。」
「でも、きっとイカちゃんの近くにはずっといるよ。」
「きっと？」
「いや、絶対。」
「うん、よろしい。」
イカちゃんの生活は薄氷の上に成り立ってることは知っている。けど、イカちゃんが

離れることになってもついていくし、私のもとに無理やりにでも連れてくる。
そうやっていままでも助け合ってきたんだ。これからもずっと一緒にいたい。
「何か困ったことがあったら遠慮なく言ってね。いつだってイカちゃんの助けになりたいから。」
「……うん。」
「大好きなイカちゃんのためならなんだってするよ。ウフフフフフ。」
「……。」
もずもずと動いて私の胸に顔をうずめる。
「ちいさい。」
板で悪かったな。
「痛い痛い痛い頭締めないで柔らかいとこないから直に痛い。」
「反省ないようですね。」
「ぎにゃーーーーーーー！」

独立のきうん

誰もいない。そのはずの家に帰る。結局あの後はたおとお昼寝をしてそのまま夜中になったんだった。

あのクソ（母親）は深夜になると帰ってくる。夜になって家にいないと警察に連絡して私を取り戻そうとするから厄介。

だから、嫌でも夜になったらたおの家から帰らないといけない。

「……。」

無言で家の扉を開ける。今は２２時。まだ帰ってきてないはずの時間だ。

部屋に入り、寝室まで見てみたが案の定まだいなかった。

この家ですることはないので、さっさとシャワーを浴びて着替えて寝る。

……すくなくともこの生活が続くことを祈りながら。

＃

「おはよう。イカちゃん。」

「おはよぉ。たお。」

幸いなことに、中学生になってからも私とイカちゃんの平和は保たれたままだった。イカちゃんは幼少期からネグレクトを受けている。だから、よくわたしが代わって世話していた。

イカちゃんは母親に月数万の小遣いを与えられるのみで、全くと言っていいほどその他の生活の補助はなかった。

中学校も義務教育じゃなければ通わせてもらえなかっただろう。

「また、クラスも同じでよかったね。」

「うん。クラス同じにするようになってるのかなぁ？」

「小中エスカレータだから情報回ってるのかもねー。」

通学路を二人で並んで歩く。保育所のころはバス通所だったから一緒にバスに乗ってたけど、小学校からは二人で同じ道を歩いてきた。

「あれから変わりない？」

「うん。いつもどぉり。」

「制服お姉ちゃんのだけどサイズあってるかな？」

「調整したら大丈夫だった。ありがと。」

「いえいえ。」

イカちゃんのお母さんはとてもお金に厳しい。入学準備のお金も出してはくれな

かったようだ。
　困って私に相談してくれたけど、イカちゃんのお母さんもこれを見越した上だったんじゃないかな。
「時間大丈夫う？」
　言われて時計を見てみる。まだ時間に余裕はありそうだ。
「大丈夫そうだよ。このままゆっくり行こう。」
「うん♪」
　ふたりで歩くこの日常が続けばいいなあ。

＃

　キーンコーンカーンコーン、とチャイムが鳴って今日の授業が終わる。そのあとはクラブ活動の時間だ。
「第二多目的、早く行こ？」
「うん。」

　中学にも将棋倶クラブはあった。ただ、私たちの入学する数年前に開店休業状態になってたけど。

先生が言うには数年前からパタリと将棋好きの生徒がいなくなったらしい。だから私たちが将棋クラブに入りたいと言ったらすごく喜んでくれた。

適当な机の上に将棋盤を置いて、その前の机の椅子を逆にして向かい合って座る。

いつも将棋は振り駒で、イカちゃんはセンスの光る振り飛車党、私は居飛車党で固く守る方。

「昔から変わらないよね、たおの指し方。」

「うん。イカちゃんと指すならやっぱりこれなんだよね。」

「そっかぁ。一通り全部試したもんね。たしか小3のころが一番色んな指し方してたよねぇ。」

あの頃はセンス一辺倒のイカちゃんをどうにか倒せないかと色んな指し方を試したんだったなあ。

結局どんな指し方でも二回目にはおおよその弱点を見つけてくるから、慣れた指し方に戻っちゃったけど。

「イカちゃんはいっつも振り飛車で大駒を捌いてるよね。」

「まあ、飛車振るのたのしいからねー。将棋でも窮屈に戦いたくないねぇ。」

ぺち、ぺちと駒を動かす音が部屋に響き、私が唸ったりイカちゃんが笑ったりする。

「小学生名人戦の時は色んな指し方する人がいて驚いたなあ。でも読みじゃ負けなかったから意外と勝てたね。」
「ひひっ。みんな弱かった。」
「全国も行きたかったね。」
「……。お母さんがね……。」
「まあ、しかたないよね。」
　ぺち、ぱちと手を進める。
「ねえ、もし色んな人と指す機会があったら指してみたい？」
「また大会い？地方なら出てる人も変わらないんじゃないかなぁ？」
「……。うーん。大会は大会だけど……。」
　マイナビ女子オープンっていう大会があって、これがアマチュアでも出れるようになったみたいで、プロの人とも対局できるんじゃないかと思って。」
「へぇ。でも親が県外に出るの認めてくれないけど。」
「それって、お金かかるからでしょ？今回は私負担で行くから。」
「え。それはそれで行きづらいけど……。」
「ぜんぜん！気にしないで。むしろこれはほんの序の口というか――」

「何？」
「マイナビ女子オープンって本戦トーナメントに進出すれば女流棋士資格を得られるんだよね。女流棋士になれば自分で稼げるから、イカちゃんぐらい強かったらすぐに遠征代ぐらい出せるし、お母さんも少々仕送りすればうるさく言わないよ。」
「うーん。そんなにうまくいくぅ？」
「イカちゃんのお母さんってさ、言い方悪いと思うけどあんまりお金以外興味なさそうだから、お金さえ出してれば文句言わないと思うんだよね。」
「まあ、確かにあの守銭奴はね。でもうちが女流棋士になれるなんて限らないじゃん。」
「いや、イカちゃんならきっとなれるよ。イカちゃんはすごく才能あるもん。ダメだったらまたいつか遠征費は返してくれたんでいいし、なんなら私が持つからさ。」
　イカちゃんが少しばかり考える。
「そこまで言うならぁ、じゃあ出てみようかな。でも旅費は自分で出すよ。」
「やった！じゃあ今度普及指導員さんに連絡するね。出場資格で一番近いもので普及指導員に有段者として認められることだから。」
「うん。」
「じゃあ日取り決まったら連絡するから。」
　話が終わったのでイカちゃんがちょっと時間をかけて盤面を見直す。

「うん！……ありゃりゃ？いつの間にか形勢が悪いような……。」
「げ、ばれたか。無意識のイカちゃん相手なら勝てると思ったんだけどーー」
「そういうずるいのはいけないとおもうなッ！」
　イカちゃんが駒台から取った銀を強打する。
「わッ！……う……ああこれを取っても取らなくてもまた不利に……。」
「ひひっ。真剣に話してるそっちもおろそかになってるじゃん。」

道場にいこう！

「さて、着きましたは数少ない将棋道場の一つ『わんこ将棋道場』です。わー。」
岩手都心の盛岡に適当な将棋道場がいくつかあったので段級位認定を行ってほしいと連絡したところ、このわんこ将棋道場が応じてくれたのだ。道場は二階建てで、そばの提供もしているらしい。
ひとりだけテンション上げてぺちぺち拍手してるとイカちゃんに冷ややかな目で見られた。
「……なんでわんこ？」
「わんこそばたべれるんだって～。」
「確かに名産ではあるけどねぇ……。」
「まあそんなことはさておき、ちゃっちゃと普及指導員さんをぼっこぼこにしてアマ有段者と認めてもらおう！」
「おー！」
＃
「たのもー！奥州から来ました藤原手折です！」

「祭神雷です。」
元気に飛び込むとお客さんが全員振り向いた。
「あらー。一階は普通の食事処らしいねぇ。」
はっっっずかし！道場だから将棋関係者しかいないのかと思ってた！
「まあ！元気のいい子が来たわね！ささ上がって。お姉ちゃん！店頼んだよ！」
店の奥から『はあーい』と聞こえる。このお姉さんが道場の普及指導員さんだろうか。姉と店番代わるらしい。
すっごく注目されてるので縮こまりながら入ってすぐの階段をのぼる。
「あなたたちが新しい子たちね。奥州からなんてかなり遠くからきたわねー。」
「はい！早速ですがマイナビオープン出たいのでアマ初段だと認めてください！」
「あら、あらあらマイナビ女子オープンねぇ。まあ段級位は指してみてのお楽しみかなー♪」
#
二階に上がったら広い和室があって、子供たちが十数人将棋を指していた。
私たちは奥の方に入って指導員さんの前に正座する。
「私はこの将棋道場の普及指導員の小野寺菫。今日は段級位認定してほしいってことらしいけど、それであってるかな？」

「はい！」
「じゃあまずはおんなじ年代の子で試してみようか。実《みのる》！翔子《しょうこ》！」
呼ばれた男の子と女の子が席を立ってこちらに来る。
そして私たちを二度見した。
驚いたようにして、二人で一言二言確認するように話して小野寺さんの横に行って耳打ちした。
「菫さん。この子達小学生名人戦岩手予選の優勝者ですよ！僕らじゃかないませんって！」
「え!?本当?……まあでも一回指してみなさい。」
何か話したらしいが、よく聞こえなかった。二人はしぶしぶといった様子で私たちの前に来た。
私の相手は翔子ちゃん。イカちゃんの相手は実くんだ。形式は３０秒指しだ。
「よろしくお願いします。」
「よろしくお願いします。」
挨拶をして指し始める。

自信を持っているが、私は序盤が強い。強いというか序盤の定跡の記憶量が多い自信

がある。
　だから相手が定跡をたどるだけの序盤指しをするレベルなら完封もできる。案の定序盤の定跡的な動きが終わってすでに大差がついていた。
「うー……。やっぱり強いなあ……。」
「序盤は得意なのよ。」
「でも、今日は実力見るためだから詰むまで指さないとね……。」
　中盤は序盤の時点の差から私優勢で進んでいった。終盤考慮不足のミスはあったものの、最終的には私がそれなりの優勢を保ったまま詰みに持って行った。
「あー。やっぱり強いね。」
「ありがとう。」
　二人で向かい合って礼をする。イカちゃんはもうすでに終わらせていたようだ。
　小野寺さんがいくつかの場面で別の手を示してイカちゃんの出方を確認してる。
「短時間だけどかなり深い読みができるんだね。直感力があるのかな。」
「えへへ。」
「実もここは上手くいなしたね。ここを間違えると頓死だったからね。」
「はい。」
　小野寺さんは指導者としてもなかなか上手のようだ。盤面を見る限り実くんはだい

ぶボロ負けしたようだからフォローに入っている。
　続けて私のところに来た。
「序盤に上手く差を広げたみたいだね。少し古いけど有名定跡はマスターしてるのかな？」
「はい。イカちゃんと違って直感力が頼りないので、直感で感じられないところは定跡でカバーしています。」
「うん。そういう指しまわしだね。早指しより時間かけて指す方が得意そうだね。翔子は序盤の劣勢を取り返せなったね。でも、終盤の藤原さんのミスを的確に指摘していたのがよかったよ。」
　二人の対局の検分を終えると、次はイカちゃんと私と順に小野寺さんと指すことになった。
「さて、祭神さんは私と香落ち、藤原さんは両香落ちでいいかな？」
「はい。」「りょ。」
　まずはイカちゃんからだ。

#

　小野寺さんの顔が青白くなってる。それに形勢がかなり悪くなってるけど無理やり

延命してミスを誘っている。無理やり勝ちに行っている。もはや目的も忘れてないかな……。

しかも、イカちゃんって平手しか指したことないから下手の指し方をしていなくて、それでも勝勢だからこれまた煽りをかけてる。

「えい☆」

イカちゃんは結局最後の詰めまでミス無く詰めきってしまったのだった。

「……参りました……。」

小野寺さんはがっくしといった様子で負けを認めた。その様子は実くんらが慰めに入るぐらいだ。

なんとか調子を取り戻した小野寺さんが言うには、イカちゃんは少なくともアマ三段以上の実力があるらしい。

「でも、すぐには適正な実力はわかんないから、また何度でも来てね。マイナビ女子オープンの本戦レベルだけど、ひとまず初段の申請をしておくね。」

「ありがとうございます。」

「ん。」

イカちゃん、ありがとうぐらい言おうよう。

「さ、さて今度は藤原さんね。もうどんなバケモノが出てきても驚かないわよ。」
「あっははー……。私はイカちゃんほど化けてないから……。」
＃
「あ、危なかった……。」
私はギリギリで負けてしまった。やっぱり終盤にミスが出ちゃうなあ。
「ありがとうございました。女流棋士となるとやはりお強いですね。」
「ええ、私は女流棋士私は女流棋士私は女流棋士」
小野寺さんのアイデンティティに深刻なダメージ与えてないといいけど。
「さあ、さて。藤原さんもまずはアマ初段がよろしいと思います。以降もいらしてどんどん昇段しましょう！私もこんな才能溢れるふたりを見いだせてとても嬉しいです。」
「ありがとうございます。」
そのあとは小野寺さんに教材を貰ったり、また指したりして時間になったのでそばを食べて帰った。

二つの相談事

今日も楽しかった。あの女流棋士さんは思ったより強くなかったけど、きっともっと強い人はいるはず。

それと、あのクソアマに私が東京に行くことを認めてもらわないといけない。

「ふあ～あ。」

こんなに遅くまで起きてることないから、すっごく眠たい。早く帰ってこないかね。あいつ。もうそろそろ1時になるはずだ。

……カランカランと音が鳴って人が入ってくる。たぶん帰ってきたのだろう。玄関から部屋まで入ってきたところで声をかける。

「おかえり。少し話あるんだけど、いいかな。」

「なに？私早く寝たいんだけど。」

少し怒気のこもった声で返事する。一応話を聞いてはくれるようだ。じゃあ手短に話すことにしよう。

「今度将棋の大会出たいんだけど。」

「はあ？そんな暇あるならバイトでもして。土日はバイト認められてるでしょ。」
「その大会賞金出るんだ。」
「そう。いくら？」
　お金の話をすれば気を引ける親ってのもなんかなあ。
「一回戦勝っても１０万。優勝なら１００万前後は。」
　まず本戦トーナメントに進出するまでにチャレンジマッチとか勝たなきゃいけないけど、交渉において不利なので黙っておく。
　　この金額なら多少は興味を引けたようだ。
「へえ。旅費はどうするの？私は出さないわよ。勝てるかどうかも知らないし。」
　こいつは私がお金を借りたりすることをとても嫌う。人を信用しない性質で、貸し借りが嫌いなのだ。それに、私もたおからお金を借りてまで出場するつもりはない。
　以前小学生名人戦に出られなかったときから貯蓄をしていたのだ。
「旅費は少しづつ貯めてた分で。」
「あら。律儀なものね。」
「賞金だけじゃなくて、東京の大会で勝ったら女流棋士になれるんだ。だから、女流棋士になって収入が得られるようになったら独立していい？」
「あなたが私に手間かけさせないようになるのはとってもいいわね。でも、あなたがい

なくなったらそれだけ損もあるのよねー。」

虚を突かれたような顔をしたけど、あいつはニヤニヤしながらそう言う。

「あなたを使って、ちょーっとお金を稼げるみたいだから、あなたが女流棋士になってもお金が稼げなきゃ意味がないのよねー。」

「何が言いたいのよ。」

「実力を示すために、その大会優勝しなさい。じゃないと独立は認めない。」

簡単に言う……。だけど一刻も早くこのクソアマの下から出ていくチャンスだ。

「いいよ。やってみせる。」

「じゃあその通りでお願いね。あ、あと女流棋士になった後は今までの養育費と仕送りも忘れないようにねー。」

そうニヤニヤと笑いながら荷物を置いて風呂場へ行く。もうすでに取らぬ狸の皮算用をしているらしい。

#

イカちゃんが帰った後に携帯で電話をかける。

『なんだい、手折。』

電話先の声は若いけどおじさんっぽい声だ。

「前からちょっと言ってたことなんだけど、内弟子の話。」

『ああ、うちで内弟子を取らないかって話ね。そうだなー、僕もそろそろ後進の育成もしないといけないかなーとは思っててね。前向きに考えてるよ。』
「ありがとう。」
『ところで、本人の意思は確認できているのかい？』
「まだ、だけどきっと受けてくれると思う。親離れしたがってるし。」
『そうか、世知辛い話だけど、助けになれるなら僕も歓迎するよ。……ところで、その時には手折も帰ってくるのかい？』
「うん。そのつもり。その時はよろしくね。」
『ああ。転校先も見繕っておくよ。』
「うん、ありがとう。じゃあまた。」
『ああ、おやすみ。』
「おやすみ。」
電話を切る。きっとこれで、あとはイカちゃんの頑張り次第だ。

女流名跡

初段を得た後は、2か月という短い期間であったけど小野寺先生の下で修業したりバイトしたりした。私は主に短時間で読む練習を、イカちゃんは新定跡とついでに礼儀を教えてもらった。

そして6月中頃、マイナビ本社で予備予選「チャレンジマッチ」が行われることになり、私たちは東京へいくことになったのだ。

「イカちゃん準備できた?」

「とっくに。たお待ちだよ。」

「あらっ、じゃあ準備できたから行こう!」

#

東京へは新幹線で行くことになった。最初は夜行バスで行こうかと思っていたのだけど、小野寺先生に計画を提出したら、引率でついてくると言って差額出してまで新幹線にしたのだ。

盛岡に着くと既に小野寺先生が待っていた。

「せんせー!お待たせしました!」

小野寺先生は私たちを見てまず最初にほっとしたような顔をした。
「ああ、よかった。藤原さんってちょっと抜けてるところがあるし、祭神さんは藤原さんについていくから心配してたのよ。」
「ええー。毎週盛岡の道場まで無事来てるじゃないですかー。」
それもそうね。なんて言って小野寺先生はごまかした。
「はい、これがチケット。前も言ったけどお金は気にしないでね。こんな将来有望な子たちに夜行バスで何かあっても大変だし、将棋界の損失だわ。」
「ありがとうございます。」
「それほどでも～。」
イカちゃんが照れ隠しに軽口を言いながら受け取る。私も御礼(おんれい)申しつつ受け取る。
新幹線は朝の便に乗る。始発で出ても開始時刻に間に合わないので一泊前提なのだが、どうも小野寺先生が連れていきたいところがあるらしくて前日の朝から行くことになった。
＃
新幹線の中、私は通路側の席でイカちゃんの頭を肩に乗せつつ外の田園風景を見ていた。
イカちゃんは飽きっぽいのですぐに田園風景に飽きて眠ってしまった。

「ほんと、祭神さんってよく藤原さんになついてるよね。」
「……そうですね……。」
なついているのはうれしいのだけど、ちょっと口ごった回答になってしまう。
「何か思うところがあるの？」
「イカちゃんとの出会いも、今までの交流もほとんど将棋を通してのものだったんですよね。
いままでは必死に勉強してイカちゃんについて行っていたけど、女流棋士になったりして、もしもプロ棋士の弟子になんてなったりしてもっと強くなった時、私なんて隅に追いやられるんじゃないかと思っちゃうんですよ。」
イカちゃんも寝てるし、久しぶりの大人の前だから少し口が緩んでしまう。
「まあ、でもイカちゃんが将棋上手になるのはとてもうれしいし、自分で生きていけるようになることは私の願いでもあるわけですが。」
「まるでお母さんね。」
たしかに、イカちゃんに対してお母さんのように接していたかもしれない。実際に、一緒にいた時間はイカちゃんのお母さんより長かったかもしれないし。
「じゃあもし私より将棋のできる彼氏なんてできたりしたら、元気に送り出さないといけないですねー。」

「ふふっ。もし藤原さんより下手だったら？」
「ボコボコにして一生立ち直れなくさせます。」
「いやーこわーい。」
「まずそんな人をイカちゃんが彼氏にしないと思いますけどっ。イカちゃんの彼氏になるなら竜王ぐらいにでもなってもらわないと！」

＃

「わーお。これが東京ねぇ。」
　イカちゃんが東京駅周辺のビルを見上げてくるくると回ってる。盛岡には駅周辺でもこんなに高いビルはないし、しかもそれがこんなに林立していることはないから初めて見る光景だ。
「イカちゃんすっごくお上りさんみたいだよー。」
「上ってきてることにはちがいないしい？じゃあ見て回らない方が損でしょー。」
　ほんとにぐるぐるまわることもないと思うな！
「まあ、まあ。私も久しぶりの景色だね。」
　そっか、小野寺さんは女流棋士として活動してたから東京には何度でも来たことはあるか。もしかしたら住んでいたかもしれない。
「じゃあお昼食べたら、私が言ってたとこ行こうか。」

「はい！」「りょ。」

＃

小野寺先生に連れられて電車に乗って数駅、原宿は竹下通りを通っていくとまるでおとぎ話のような古い教会のような建物があった。

「すくねーびっとちぇん？」

ほぼ反射のように店の前にかかってるプレートを読む。絶対コレジャナイ。

「シュネーヴィットヘンだね。ここは私の先輩の女流棋士さんの店なんだ。」

なるほど小野寺先生の知り合いらしい。

「釈迦堂里奈女流名跡がいらっしゃる。十数年このタイトルをもつ超ベテランなので失礼ないように。」

「はい！」「ふぁーい。」

「特に祭神さんね。」

名指されるとイカちゃんはへにゃっと笑った。

「にひひ。」

かわいいのでＯＫ！

「藤原さんはかわいいのでＯＫみたいな顔してないで気を付けてくださいね。」

店の中に入ると、奥には黒いドレスを着た美人なおば…さまがいました。
「小さきテンプルナイトよ。よく来たな。」
「釈迦堂先生、お久しぶりです。本日はよろしくお願いします。」
「「よろしくお願いします。」」
「二人もようこそ我が城へ。まあ、まずこちらに座るがよい。」
促されて失礼します。と釈迦堂先生の前に並んで座る。
「そちらの子供たちは岩手に埋まっておった原石たちだったかの。」
「はい。若輩者の私ではわからないところもありますので、一度見ていただきたく思います。」
小野寺先生もなんだか緊張した面持ちで、それに迂遠な言い回しが少しうつってる。
「よかろう。原石も磨かねばわからぬ。ここはひとつ私と指してみようではないか。名前は何という。」
「藤原手折です。」「祭神雷です。」
裏から私たちと同年代そうな白いスーツを着た少年が出てきて将棋盤とチェスクロックを私たちの前に置いた。
「明日は戦いが控えておるのだろう?今日はあまり時間をかけられぬ故、申し訳ないが

平手とさせてもらう。
まずは……そちらの藤原君に指してもらおう。」

＃

めちゃくちゃ釈迦堂先生は強かった。ベテランらしい引き出しの多さで私の知らない手を指されることが多く、持ち時間は少なくはなかったのでわたしも粘って考えていたが、時間が差し迫ると私のミスが目立って負けてしまった。
「うむ。悪くはないな。まだまだ磨けるが、彼女にあったカットのしかたまでしっかり考えなければ十全にはならんだろうな。」
つまり、どういうことだろう。修行のしかたはよく考えた方がいいってことかな。
「細かいことはあとでテンプルナイトに言っておこう。次は祭神君だ。」

＃

イカちゃんは序盤、中盤と優位に進めていたようだが、その割に駒数は少なくなっていた。
「まるで魔法だな……。」
小野寺先生が感心したようにつぶやく。
「どういう状態ですか？」

「ああ、見ての通り、祭神さんが攻めることはできているが、これは釈迦堂先生の思う壺で、釈迦堂先生は巧みな守りで祭神さんの攻めを途切れさせて、駒得を続けている。」

その通りに攻めが続かず、イカちゃんの手が止まった。

「ひひっ。掴みどころのないば…　お姉さんだねぇ。」

そのまま盤を食い入るように見つめて、動きを止めた。

「イカちゃんが早指しをやめた……！」

はじめてのことだ。イカちゃんはどんなに持ち時間があっても早指しをする。自身の直感と短時間での読む能力を信用した指し方で、いままで私を含む誰との対局でこの指し方を曲げたことはなかった。

「……。」

やっぱり、それだけ釈迦堂先生が強いということなんだろう。でも……

「すごーく、嫉妬しちゃうな。」

＃

釈迦堂里奈

私は内心ほくそえんでいた。この対局、元は小野寺に頼まれたものだが、それはこの暴れん坊に少しばかり灸をすえてくれということだった。そのために最初から守りを固め、そして思惑は成功した。

「ひひ、ひひひひひひひ……。」

今、祭神は直感的に見える指し手をことごとく封殺され、あの独特な笑い声もトーンダウンしてしまった。

小野寺も予選前にずいぶん酷なことを頼むと思ったが、直感で見えていたらしい手も大局観に欠けるものの、その場の最善手に近い指し手だったので相当な才能があるようだ。これなら心が折れていても予選ぐらいは通るだろう。

いまだに祭神は長考中。今までの早指しで時間はたっぷりあるが、慣れない頭の使い方をしているらしい。なかなか苦しそうだ。

「そうだ。頭を使え、祭神よ。ただの獣ではないだろう?」

その言葉に答えるように、汗を振りまきながら祭神は次の一手を指す。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

しかしーー

「まだ浅い。」

祭神が考える時間があったということは、私にも考える時間があったということだ。そして次の手を指す。

「ひっ!」

さらに悪くなる局面。祭神は肩で息をしながら考え込んでいた。かわいい額に玉のように汗をかいている。およそ、直感で見える手をすべて読み込んで精査しているのだ

ろう。
　そして何か見えたのだろうか。最後の持ち時間を振り絞って考え、考えた先の答えを指そうとし――
『ピー！』
「時間切れだな。」
　＃
　イカちゃんが振り上げた手をそのまま、意識を失ったかのように将棋盤へ倒れこむ。
「イカちゃん！」
　駆け寄って助け起こすと意識は失っていなかったけど、疲れ果てたようだ。私の胸に頭を預けて私に抱き着くようにして荒い息を整える。
　これは小野寺先生ではできないだから、きっと小野寺先生が釈迦堂先生に頼んだのだろう。それはわかっても、イカちゃんを追い詰めたその下手人には鋭い目を向けてしまう。
「おお、怖い怖い。まるで子を守る母猫のようだ。」
「藤原さん。釈迦堂先生を責めるのは筋違いですよ。」
「……そう…ですね。」
　そうして目を伏せる。幾分か経つとイカちゃんも息が整ったようだ。

「釈迦堂先生、失礼しました。」
一礼する。イカちゃんも立ち上がって一礼する。
そして釈迦堂先生が仕切りなおすように言った。
「さて、遅くなってしまったがランチにしようか。かわいい弟子たちが準備してくれている。歩夢！マリア！」
ぴょこっと裏の方からピンクのけもみみとはね毛が飛び出してきた。そしてするっと出てくる。
「紹介にあずかりました、釈迦堂先生の弟子の神鍋（かんなべ）……いやゴッドコルドレン歩夢（あゆむ）です。こちらは妹の神鍋馬莉愛（マリア）です。」
ゴッド、コルドレン？
「わ、わらわは《エターナルクイーン》釈迦堂里奈じょりゅうめいせきのでし！になるもの神鍋マリアじゃ！」
彼は対局前に将棋盤とお茶を用意してくれた人だ。ゴッドコルドレン？名前の途中によくわからない言葉が聞こえたけど、たぶん神鍋歩夢さんだ。私たちと同年代ぐらいかな。その横には…つまりのじゃロリと形容するが一番即した幼女が出てきた。
「きゃー！かわいいー！」
「なっ！なんだきさまは！」

小野寺先生がマリアちゃんを愛い愛いと愛でている。……最近女性でもロリコンとか言われるらしいですよ。

それはさておき、

「神鍋歩夢さん。先ほどはお茶をありがとうございます。おいしかったです。」

「ありがとう。マリアも居て紛らわしいので、歩夢とお呼びください。レディ。」

「あら、ではお言葉に甘えてそう呼ばせていただきます。」

紳士な一礼を受けてしまった。なんだか立ち振る舞いが二人とも釈迦堂先生に似てるな。それが弟子ということなのだろうか。

そんなかんじで話していると、二人が出てきた扉の奥からなんともいい香りがしてきた。

「ひひっ。すっごーくいい香りがするねぇ。」

「そうじゃな。さあ、みな行くがよい。食卓は向こうだ。」

歩夢くんに寄り添って歩く釈迦堂先生の後に続いてみな奥へ向かった。

#

「「いただきます！」」

みんなで食卓を囲んで合掌する。料理は思いのほか和風だ。おいしい！

「釈迦堂先生！こいつが私をいじめるんですよ！」
「まあ、まあ。マリアがかわいいということだから素直に受け取るといい。」
「そういえば、以前先生がおっしゃってた兄妹というのは彼らのことでしたか。」
「そうだ。珍しいことに女流棋士の下に来たのだよ。」
「いえいえ、師匠は素晴らしい棋士ですよ。」
そう話しつつ、やわらかい雰囲気のまま食事が終わった。
その後、食器を片付けるのぐらいは手伝おうとしたけど、釈迦堂先生に止められてもとの部屋に連れていかれた。
＃
「さて、今日の演目は棋戦だけではなくてな、こういうものも用意してある。こちらも今日のメインだ。」
釈迦堂先生がそう言ってカーテンを引くと、たくさんのドレスがラックに掛けられていた。
「さて、二人はそこに座って待っておれ。最高に着飾らせてやろう。宝石も磨かねば石よの。」
＃

「では二人とも着替えたな？3、2、1」
バサッと私とイカちゃんの間のカーテンが取られる。
「わあ……。」
イカちゃんは純白に身を包み、まるで花嫁のような、でも豪奢すぎないドレスに身を包んでいた。蜂蜜色の髪が煌びやかに映えて黄金のように輝いている。
「あ、あんまり見ないで……。」
照れてる姿も美しい……天使かな？
「うむ、やはり金の髪は白いドレスだな。どうだい？藤原くんは。」
実は私もドレスを着ている。
「たおちゃんかわいい……。」
「そうだろう。藤原くんの藤色の髪にはやはり黒色が合うと思ってな。ウェディング風味の黒ドレスだ。
うちは写真館でないのが残念だが、まあいくらか写真は撮れる。どうだい、いくつか写真でもいかがかな？」
そう言う釈迦堂先生の横にはカメラを持った小野寺先生が。というか小野寺先生の方から有無を言わせない圧力を感じるのですが。
「さあさあさあ二人ともまずは手つないでみましょうか！なに、仲良しなら変なことは

ないですよ！」

そういわれると変な気がしない!?

しかし手の甲にちょこちょこと感覚が。

「たお……手ぇつなご？」

こちらに向いていなかったものの、真っ赤な耳はイカちゃんの照れ顔をありありと想像させた。

もう……すき！

割れ物を扱うかのように、イカちゃんの手をそっと取りカメラを向く。

「おお……神よ……。」

小野寺先生がなにごとかつぶやきながら写真を撮っている。

「こっ、今度は二人向かい合って！で、祭神さんは左手を出して、藤原さんは両手をその手に添えて、二人でその手を覗き込むように！」

「こうですか？」

「そう！いい！最高！」

イカちゃんが手を差し出して、私が両手を取ってるとこれって……何か指輪つけてるみたいな……。

「じゃあ次行ってみようか！」

また小野寺先生に言われるままに寄ったり、指を絡めたり、もう途中からは恥ずかしくて爆発しそうで、もうあんまり記憶に残らなかったけど、いつのまにか釈迦堂先生の家を出ていた。

あっとホテル

釈迦堂先生のところから出て、原宿からそれなりに電車に乗って千代田区北の方に戻った。
「もう最後の方何撮ってたか記憶ないんだけど、小野寺先生ノリノリだったねー。」
「ひひっ。すっごく楽しそうだった。」
その小野寺先生は正気に戻ったみたいで『なにやってんだろ……。』みたいな顔になって落ち込んでる。
「ごめんね、今日は。もとはちょっとしたかわいい写真撮るつもりだったんだけど、釈迦堂先生が完璧な服選びで変なタガの外れ方しちゃった……。」
「いえいえ、いいですよ。新幹線代出していただいていますし。それと、あとで写真ください。」
「ひひっ。かほーにする。」
「ええ、一番いいやつを送るわ。」
ぼちぼちと3人で歩いていくと、今日の宿に着いた。
チェックインの手続きは小野寺先生に任せて、エレベータで上階に上がって部屋を

別れた。私とイカちゃんが同じ部屋で、小野寺先生は別の部屋だ。
「おやすみー。小野寺先生。」「おやすみなさい。小野寺先生。」
「おやすみ。明日は7時半に下のロビーに来てください。そのままチェックアウトだから荷物も忘れないように。」

＃

ホテルの部屋は小野寺先生の申し出がある前のベッドが段組みになってるだけの簡素な部屋ではなく、ベッドが2つ並び、テレビもユニットバスもある部屋だった。
時刻は18時。夕食はここまでの途中で食べた。
「たおちゃん先お風呂入っててー。」
ひとまず荷物を置くとそうイカちゃんに言われたので先にお風呂をいただくことにした。

そういえばユニットバスは初めてなんだけど、どう使うのがいいのかな?ひとまず脱いで入ったものの、体・頭を洗うにもバスタブの横すぐトイレだもんなー。
そんなことを考えてると突然入ってきた戸が開いた。
「たおちゃーん?ユニットバスの入り方わかるかなー?」
い、イカちゃん!?

「ちょ、ちょっと！私いま全裸！」
「いいじゃないのー。昔は仲良くお風呂入ってたじゃん？それに結婚したし。」
イカちゃんがにんやりとしながら言ってくる。
「してなーい！そんな感じの写真だったけど！」
逆にあんな写真撮ったあとだから変に意識しちゃうの！
「まあまあごめんね、ユニットバスはふたりで使う場合、先二人体洗った方がいいかなって思って。そうじゃないとお湯はっちゃったら次の人体洗う場所なくなっちゃうから。だから体洗ったら言って！」
そう言い残して戸を閉めてしまった。
「はあ……。」
まあ、きっとお昼の感覚が変に残ってるだけなんだろう。そりゃ保育所のころぐらいならこういうこともあったけど、さすがに中学生になったら一緒にお風呂はまずいんじゃないかな。
どうまずいかっていったら、まあなんだろう、イカちゃんの社会的評価にも関わっちゃうからね……。たぶん、そういうことだと思う。それに狭いから入れないし。
イカちゃんに言われた通り、体が洗い終わったらタオルに身を包んでイカちゃんと交代した。イカちゃんがエアコン入れてちょっと暖かめにしていてくれたのであまり寒

くはなかった。
「お風呂入れといたから、お先どうぞー。」
定跡の最終確認をしていたらイカちゃんが出てきたので交代してお風呂に浸かる。
カポーン、なんて音はならない。というか普通に狭い。きっとお外でイカちゃんも冷えてるだろうからそれなりに温まったら出ないと。
……それにしても、あのイカちゃんはかわいかったな。……きっとあの隣に誰か、私の知らない人が立っているんだろうな。……知ってる人の可能性もあるかな。でも、きっと……その隣は私では――
「おーい……たお、まだ?さすがに冷えちゃうよー。」
「うわっ!」
いつの間にか時間が過ぎて、浴室の外にイカちゃんが待っていた。
「ごめん!すぐ出る!」
手早く水分をふき取って寝間着の浴衣っぽいやつを着てイカちゃんと交代した。

二人ともお風呂から出た後は対局したり、将棋オセロで裏表になってるマグネット盤だったので気分転換にオセロしてみたり、詰将棋の競争したりした。
「やっぱり釈迦堂先生との対局の後からちょっと思考時間増えてるよね?」

「うん。前と変わらず直感的な良手は浮かぶんだけど、もっといい手がないか探すようにしてるんだ。」
「例えば……ここかな？」
局面を戻して再現する。今までの対イカちゃん定跡であればここでは変化しないはずなのだ。
「そう、それ。奏功はしなかったかな……。」
「うん。いつもならこっちでしょ？」
戻していつも通りの手を指しなおす。そして続けて局面を動かしていく。
「こっちは中期的には悪そうに見えるけど、最終的にはここまでくると効いてくるからやっぱりこっちでよかったんじゃないかな。」
うーん、ぬあっと妙な声をあげながらイカちゃんがベッドに寝転ぶ。
「やっぱり付け焼刃で考えてもダメかぁ～。」
「でも、さらに進化するなら考えないといけないからねー。」
「でもねー。まあ……するけど。」
枕に顔を埋めてもごもごと何ごとか言ってるけどよく聞き取れない。慣れないことして失敗したのが悔しいらしい。
「今日はもうおやすみにしよう？もう11時だし明日早いし。」

「うーん。そうしよう。」

それぞれベッドに入る。なんだかいっぱいあって忘れそうになってたけど、明日は女流棋士になるための道の第一歩だ。これが抜けれないと何も進めない。

ベッドに入って目をつむる。なんだかんだ今日はいろいろしたから眠気は自然と増大していつの間にか眠りについていたのだった。

＃

むくっと起き上がる。……眠い。……昼間トイレ行ってなかったからトイレ行きたくなっちゃった……。

＃

カーテンの隙間から光が差し込んできて、瞼に光が焼き付く。もう朝だ。何時だろう……。

光を手で遮りつつ、目を開けるとすぐ前にイカちゃんの寝顔が。

「……。」

おふろでは入る入らないとわちゃわちゃしてたけど、実は一緒にお昼寝することは多かったので実は見慣れた光景ではあったのだ。今もまた腕を背に回して、足を絡めて私が身動きが取れないぐらいくっついている。

それにしてもこのふにたれた（？）イカちゃんの顔には人類の宝だなー。これを今だ

けとはいえ占有できるのはほんとにイカちゃんと一緒にいてよかったなーって気持ちになる。

さて、時間は……6時か。朝食も食べる時間も必要だし、そろそろ起こそうかな。

チャレンジマッチ

「さあさて、対戦表はこの通りらしいね。」
　ホテルを出て現地に着くと、ちょっと本人確認をされた上で待合に通された。そこには対戦表があった。
「あ、たおと別ブロックじゃーん。よかったねー。対戦なしに二人とも予選にいけるねー。」
「ほんとだ。」
　チャレンジマッチには敗者復活戦があるので二回負けると通過できないのだが、逆に二人同じブロックでも通る可能性はあったのだ。でも、別になってるならそれはそれで都合がいい。
「あ、あの子かわいらしいわねー。」
「小野寺先生、よく知らない子まで変な目で見るのはまずいですよ。」
　小野寺先生が遠目に、小学五年生ぐらいだろうかかわいらしい銀髪の女の子を見てる。
「そそうね。さすがにそれはまずいわね。」

「そうだよー？昨日のマリアちゃんの時もだいぶあやしかったよー？」
　この数日で小野寺先生の趣味がすごくわかってしまったなあ。
「んん〟。私は仕事があるから、そっちの打ち合わせに行きます。荷物は預けれるらしいから、そっちに預けちゃいなさい。」
「はい。」「はーい。」

＃

『今年も始まりましたマイナビ女子オープン予備予選「チャレンジマッチ」。ネット解説は私、小野寺菫と兵頭八段が努めます。』
「兵頭先生、よろしくお願いします。」
「こちらこそ、よろしくお願いします。」
　仕事というのも、観戦記者の仕事なんだけど。となりのスーツのおじさんはこの日のために関西の方から来てくれたプロ棋士さんだ。
「注目の選手はいらっしゃいますか？」
「そうですね、やはり一番の注目選手は女性ですが奨励会に入会されている空銀子さんですね。」

「そうですねー。やっぱりかわいいですよねー。」
「はい。かわいいだけじゃなくて最年少小学生名人で、棋力も十分です。チャレンジマッチ通過は固いでしょう。」
『注目の選手は最年少小学生名人の空銀子六級です。棋譜の方を見ていきます。』
「……ところで、今日はお二人アマチュアの方を連れてこられたそうですが、いかがですか？」
「藤原手折アマと祭神雷アマですね。二人ともチャレンジマッチは難なく通過できると思いますよ。さて、空銀子さんのほうですが……。」

＃

「空銀子六級は初戦を快勝。圧倒的な力の差を見せつける形になりましたね。」
「そうですね。六級は女流棋士並みですからね。月夜見坂燎女流玉将の例を見ると本戦には進出できる程度の実力があるかもしれません。」
「ほかの対局も見ていきましょう。……あら、空銀子さんより先に初戦に勝っている方がいますね。」
「そうですね。祭神雷アマです。」
　さすが、祭神さんやるじゃない。と内心思う。仕事だから身内びいきでコメント付けることはできないから、実力を示してくれるとコメントしやすいからだ。

「こちらも棋譜にコメントをつけておきましょうか。」
『初戦を最初に突破した祭神雷アマは後手を取りました。対局相手は元禄錦アマ。祭神雷アマは即座に5六歩5八飛車。ゴキゲン中飛車を宣言します。』
「思い切りのいい指し方ですね。プロでは飛車の使い方を隠すこともありますが、女流戦ではのびのびと指しあう戦いが魅力でもあります。」
『兵頭八段「女流戦らしい思い切りのいい指しっぷりです。」』
「どうですか、ここからの指し回しは。」
「そちらの方がよくお分かりではないかと思いますが。」
「そうですが、プロの方を通した方がコメントとしてよくなりますので。」
話しつつコメントを書き加える。
『元禄錦アマは昨年は本戦手前まで進出しており、アマチュアの中でもなかなかの手練れです。』
「元禄錦アマも飛車を振りますね。女流戦ではよく見る光景です。それを受けて祭神雷アマが指しますが、これは考慮時間はとても短いですね。手をはなしてすぐに指しています。」
「そうですね。これは相手にプレッシャーを与えます。」
『祭神雷アマは相手の指し手に対して即座に指しました。』

「この後は祭神雷アマは超早指しを続けますね。それに、力戦形へ持ち込んでいきます。」
「そうですね。元禄錦アマこれは良くない、相手のペースに飲まれています。」
『祭神雷アマの巧みな誘導で力戦へもつれ込み、その後超早指しとなります。兵頭八段「祭神雷アマのペースに飲まれていますね。」』

「どんどん元禄錦アマの持ち時間が無くなっていきますね。」
『ここで元禄錦アマの持ち時間が無くなってしまいました。そして致命的なミスがあり、それを的確に指摘した祭神雷アマの勝利になりました。』
「どうでしょうか。この対局は。」
「祭神雷アマの作戦勝ちといったところでしょうか。かなり自分の能力に自信が無いとできない指し方ですが、見事に成し遂げました。」
『兵頭八段「祭神雷アマの強さが光る対局となりました。元禄錦アマも時間があるうちは的確な将棋を指していましたが、攻めきれなかったのが惜しかったですね。」』

#

その後、祭神さんも藤原さんも快勝快勝で四連勝！ブロック優勝者にはインタビューがあるので、現在インタビューを受けてるという訳だ。というか私もインタビューしてる。

「チャレンジマッチを通過した感想はいかがでしょうか？」

やっぱりかなり注目を集めている。女流棋士としての才能は棋力だけではなく、ルックス面も存分にあるからね。一応非公式といえども大会なので二人とも制服を着ている。実に黒セーラーだ。

「もっと強い人と指したいです。」

取材陣がおおっと色めき立つ。祭神さん……他意はないんだろうけどそれ今日の対戦者みんな弱いって言ってるようなもんだよ……。敬語が出てきたのはえらいけど。

「えっと……目標に向けてまた一歩進めました。」

そう、そういう感じ！藤原さんはまだわかってる！すかさず藤原さんに注目を集めよう。

「どのような目標なのでしょうか？」

「はい。女流棋士になるのがひとまずの目標です。」

質問権がほかの記者に移ってそちらが質問する。

「勝利の喜びは誰に一番に伝えられましたか！」

「えっと、イカちゃんが待っててくれたのでまずはイカちゃんに伝えました。」
「その時にこっちも伝えました。」
よし。ほほえましい感じだ。でもここで二人とも見つめ合って微笑むと――
「これは……」「百合じゃな？」「キテル？」
私はまだ（恋愛方面には）キテナイと思う。……じゃない！本人たちとしてはどうなんだろう？そう書かれちゃってもいいのかな？
「お二人の関係はどういう関係なのでしょうか！」
「？保育所からの幼馴染です。」
「毎日一緒にすごしてます。」
先ほど以上に取材陣が盛り上がる。これは記事の方向性が決まっちゃいましたね。藤原さんが祭神さんに『まちがってないけどさあ！』とか言ってるけどいちゃついてるようにしか見えないよー。

一斉予選（？）

インタビューが終わった後はみんな疲れてたので、お土産を買って帰宅するだけだった。

奥州より先に盛岡に着くので、一度道場に寄ってから帰ることにした。

「お姉ちゃんただいまー！」

「お邪魔します。」

「おっじゃまー♪」

「あ！すみれー！おかえりー！」

裏から入って上の道場に上がる。

「さて、今日はお疲れ様。全勝で予選進出を決めるなんて、私はとっても嬉しいです！」

「あはは、ありがとうございます。」

「にひひ。」

「打てば響くように伸びていったからもしかしたらうまくいくかもしれないと思ってたけど、ほんとにすごいです！チャレンジマッチには女流棋士もアマもやはり強い人が来ますから、その中で勝ったことは以降の予選で戦う上でも自信にしてもいいです。」

小野寺先生すごく喜んでる。

「でも、まだ予選までは一か月あります。この二か月で大きく成長できましたから、いつもと違うプロの棋士たちと戦った経験をもとにさらに成長できるはずです。さあ、忘れる前に確認しておきましょう！」

「ふぁーい。」「はい！」

#

そんなこんなで一か月が過ぎ、一斉予選がやってきたのだ。とはいえ、私（小野寺）の見通しでは一斉予選もあまり大きく変わらないので……。

「ほんと、二人とも強いわね……。」

数日にわたる一斉予選も突破し、また笑顔でインタビューを受けているのだった。実力は本戦レベルまであると思てたけど、あの空銀子と当たらなかったのも予選突破に影響は大きかっただろう。

司会が先ほどまでインタビューを受けていた人を退場させて、藤原さんを呼ぶ。

『藤原手折アマ、本選進出おめでとうございます。』

「はい。ありがとうございます。」

『初めての全国規模での公式戦ということですが、緊張はされたでしょうか？』
「はい。イカちゃんに、あイカちゃんっていうのは祭神雷アマのことですが、イカちゃんに置いてかれたくない一心でした。」
　うんうん。仲が良いことは良いことだ。
『祭神雷アマとはとても仲良しらしいですが、対局前に何かお話しされたのでしょうか？』
「今日もがんばろうね、とかそれぐらいでした。イカちゃんもあくまで将棋には真剣なので。」
　そのあとも仲がよろしいことは分かるけど、普通の応対という形で終わった。
『それでは次の祭神雷アマ。よろしくお願いします。』
「にひひ。よろしくー。」
『本戦進出おめでとうございます。』
「とーぜーん。」
　あ！祭神さんにインタビューの基本確認しておくの忘れてた！
『予選の対局はいかがだったでしょうか。』
「たまたまだけどぉ、強い人はあんまりいなかったかな。」
『あっと……では対局されたい方は居ますが？』

「うーん、たおちゃんと公式な場で対局してみたいってのもあるけど、空銀子ちゃんが強そうだし銀子ちゃんにも興味あるかなぁ。」
記者もうんうんという感じで、記者側も空銀子と祭神さんの対局を期待しているようだ。
そのあともちょっと無意識に煽ってるところはあったけど、全体的には問題なくインタビューは終了した。

#

インタビューを終えたイカちゃんに走り寄る。そのまま腕をつかむ。
「よかったね！イカちゃん。これで独り立ちできるね。」
本戦進出に伴い、私たちは女流棋士になれることが確定した。すなわち、自身で稼ぐすべを手に入れたのだ。
「うん……」
でも、イカちゃんは浮かない顔をしていた。
「どうしたの？もしかしてこれからが不安とか？」
「……。」

「大丈夫だよ！イカちゃん強いし本戦進出するまでにいっぱい女流棋士にも勝ったじゃん！」
「そうじゃなくて……。」
顔を伏せ、弱弱しくつぶやくようになる。どうしたのだろう？女流棋士になれるから収入は得られる。あのお母さんのことだから収入さえあれば反対しないと思ってたけど、もしかしてすごく反対されたのだろうか？それとも……
むぎゅっと、やわらかいものに包まれる。
「心配しないで。何とかするから。」
イカちゃんの胸に抱かれているようだ。体を通してイカちゃんの声が聞こえる。
「何とかって、むぐっ」
「だから、何とかする。たおは心配しないで。」
いつにもまして真剣な声。これは何を言っても聞かないかな。
胸から顔をよけてイカちゃんの顔をまっすぐと見る。
「わかった。でも、困ったら一番に相談してね。力になれないかもしれないけど、イカちゃんの悩みは一番最初に聞きたい。わがままだけどその代わり詮索しない。」
「うん。ありがとう。困ったら、言えるようになったら最初に言うね。」
「約束だよ。」

「うん。約束。」

＃

インタビューが終わると、たおが駆け寄ってきた。本戦に進出して女流棋士になれることを喜んでいるみたいだ。

それに、女流棋士になればあのクソアマから解放されると思ってるらしい。でも、女流棋士になったとしてもあの家から出るにはこの大会で優勝しないといけない。それまでにはたおに当たる可能性がある。だから言えない。

いや、たおは私には優しいから言えば私にとっては楽なことなのかもしれないけど、たおに気を遣わせたくないし、本気で将棋を指す人間になるというのに、そんな口裏を合わせるなんていうことはできない。

だから、誤魔化す。

ソフト指し

一斉予選が終わり、平日学校へ行き、週末は道場に行く生活が続いていた。

「藤原さんって、脳内将棋盤って表現聞いたことある？」

そんな突拍子もないことを言い始めたのは小野寺先生。道場にてだ。

「脳内将棋盤って、脳内の将棋盤ですか？」

あまりに変なことを聞かれたので、こっちもただ聞き返すような返事をしてしまった。

「その様子だと、特に聞いた事ないようね。棋士独特の表現かもしれないけど、思考の中で将棋をする能力のことを言っていて、強い人は何面と同時に思考できるとか。」

ええ……棋士って異能者だったのか……。

「えっとー、私はあんまり思考内で将棋を指すのは得意ではないですね。どうしても一部分に意識が集中しちゃうというか、頓死筋が見抜けなかったりします。」

「まあ、そうよね。私もそこまで明確に脳内将棋ができるわけじゃないわ。」

「それにしても、急にどうしたんですか？」

「以前に釈迦堂先生とお話した時に、藤原さんに勧めるべき練習法の一案を聞いてね、そ

れを言う前の準備として聞いただけ。」
「なるほど。では教えて頂けるということですか?」
「そうね。」
　腕を使って正座のままずいっと小野寺先生に寄る。
「早速教えてください!予選で危ういところも少なくなかったですから、少しでも棋力を伸ばしたいです!」
　あらあらと小野寺先生がスイと身を引く。
「じゃあまず、将棋ソフトって使ったことある?」
「ソフトですか?市販の将棋ゲームなら大抵勝てますが……。」
「あー、そういうゲームものじゃなくて、研究用の学習機能を備えたソフト。まあそういうのがあるんだけど、それを使ってみるのもいいかなと思って。」
「なるほど。どういう形で使うのでしょうか?」
「簡単に言うと、難しい局面に対するソフトの解を見てそれを参考に新しい定跡を組むってこと。藤原さんの思考能力なら時間はかかってもソフトの指し手を理解できると思うから。」
　そう言うと小野寺先生は席を立った。
「ちょっとパソコン取ってくるから待ってて!」

パソコンを取ってくるのか。おとなしく待っていることにしよう。
「たお、何か新しいのするの？」
イカちゃんがとてとてと定跡書を片手に私の隣に来て正座した。
「うん。最近はソフト〝が〟将棋できるんだって。」
「ソフトが？」
「研究用のでね。その手を参考にしてみるとか。」
「へえー。」
そうとだけ言うと興味を失ったのか、定跡書を読むのに戻ってしまった。
「イカちゃんは定跡？」
「うん。こっち序盤に損しすぎるとひっくり返せなくなるから、少なくとも相手の定跡を理解するぐらいしないとねー。」
イカちゃんは中盤終盤の大駒使いの感覚が鋭いし、読みも深いが定跡塗れの序盤に損をしがちだ。だから序盤に損が少ないように定跡の勉強をするようにしている。
「でも、定跡通りに指すこと少ないよね？」
「うん。私の方が強いし。」
なんてことない顔して言ってのける。
「ほんとにー？」

「うん！こっちのほうが強いさ！」
　だから、大丈夫！と言い聞かせるように言う。
「わかったわかった。イカちゃんはまた強くなってるからね。今なら釈迦堂先生にも勝てるんじゃない？」
「そう！」
　イカちゃんは強くなっている。最近はイカちゃん相手の勝率もめっきり下がってしまった。
　そんな話をしていると、小野寺先生がでっかいパソコンを持ってきた。
「よいしょっと！」
「わあ！おっきい！」
「いやー高かったわよ。百万はしたわ。」
「もしかして、私のために……？」
「いや、私も昔ソフト研究してみたくて。結構計算能力食うからたっかいの買わないと時間かかってね。それに、これ見て。」
　小野寺先生がパソコンをぐいっと横に回す。その面はクリアガラスになっていて、内部がよく見えるようになっていた。内部は管や機械や基板やファンでゴテゴテしてるし、至る所ピカピカ光ってる。

「ほら、カッコよくない？」
　自信満々に小野寺先生がこっちを見てくる。でもね
「配線とかは機械らしくてよいですが、ここまで光らせる必要は？」
「カッコいいじゃない。」
「光らせるのは成金趣味っぽいです。」
「成金趣味……。」
　小野寺先生がっくりうなだれてしまった。『まとまったお金入ったし店員に乗せられたのよ……。』なんて言ってる。
　話を戻そう。
「ところで、将棋ソフトってどういうのですか？」
　言われてハッと面を上げて、パソコン出力をテレビに繋いでカチカチカタカタと操作する。
「そうね、これなんてどうかしら。」
　見せられたのは中盤の局面だ。悪手はないが、超良手もない。
　というかこれって……
「これ一斉予選の3局目ですね。私はこう指しましたが、感想戦でこっちの方がいいかなってなりました。」

「そうね、ではソフトの回答はどうかしら。」
　小野寺先生が開始をクリックすると、パソコンのファンが大きな音を立て、ポンプも駆動し始める。そして数秒後、ソフトの指し手が表示された。
「これは……！」
　その指し手には驚きを隠せなかった。
「どう？ふたりの棋士が対局後のメタな視点から検証しても、これは出なかったでしょ？」
　その通りだ。この指し手は読めなかった。ないと思っていた超良手がそこにはあった。
「ここからこっちの攻めに動けるし、対応されても有利な拠点を確保できる……！先生！これ凄いですよ！」
「そうでしょう？こういう常識的に思いつきにくい手をソフトで発見・検証するってわけ。」
「すごい、すごいですよ！」
　これを使えば、ひとりで研究するよりもよっぽど早く研究できる。これを使わない手はないだろう。
「でもね、ひとつ気をつけて欲しいことはあるの。」

「何でしょうか？」
「ソフトって、悪手を指さない前提で成り立つ手とか玉が薄くなる手を指しがちなのよ。だから、愚直に真似しようとしてもかえって頓死とかしちゃうのよね。例えばこれ。」
　別の局面を出してくる。終盤のこちらが不利な状況だ。
「これを計算させると、ここを指すのよ。」
　ソフトの指し手は逆転狙いの一手。しかし……
「うーん？うん？これって成立してるんですか？」
「一応は成立してるわ。これをこうすると、こうなって、こうこうこうこう。」
　小野寺先生が自分で操作して相手玉を詰めていく。その攻めは細く細く並のプロ棋士でも難しいだろうと思わせるような攻めだった。
「ほらね、詰んだ。」
「……たしかに、これは自分でやれって言われたら無理ですね……。」
「うん。だから下手に真似すればかえって自滅する。だから気をつけてね。じゃあ使い方覚えよっか。最近のパソコンなら時間はかかるけど動かせるから、自分のパソコンにも入れておいてね。」
「はい！」
　その日はソフトの使い方、簡単な仕組みとインストール方法を教えて貰って何度か

使ってみたのだった。